

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

低年次学生の基礎科目学習動機の向上を促す看護基礎教育の方法開発：
医療現場を描いたドラマを用いて

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-01-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 因, 京子, 力武, 由美, 吉永, 宗義, 石橋, 通江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000034

著作権は本学に帰属する。

報告

低年次学生の基礎科目学習動機の向上を促す看護基礎教育の方法開発 —医療現場を描いたドラマを用いて—

因 京子¹⁾ 力武 由美¹⁾ 吉永 宗義¹⁾ 石橋 通江¹⁾

臨地実習を行う前の看護学専攻の低年次の学生に対する教育素材と教育活動方法を開発する試みの一つとして、医療施設を舞台とするテレビドラマを利用した実験授業を 2 度行った。目的は、医学と看護学の基礎科目の学習の必要性を強い感情と共に認識する体験を与え、学習動機と学習技能を向上させることである。参加者の口頭および書かれたコメントからは、学習者が大きく心を動かされた様子が見られ、基礎的知識が現場での対応に必要であることへの萌芽的理解と、基礎科目学習の意義の認識と学習動機の高まりが観察された。以上から、今回の実験授業の素材としたドラマとクラス活動として用いた方法とは基本的に適切であり、掲げた目標を達成するための方法としてこの授業方式は大いに可能性を持つという結論を得た。しかし、医学情報の供与に多くの時間を取られ、迅速に議論を進めるため教師主導の質疑応答が主となったため、学生主導の活動をほとんど行うことができなかった。掲げた目的を達成するには、知識そのものの供与ではなく知識の必要性の認識の形成が目的であるという点を指導者が十分に意識しておくべきこと、ひとつの素材を扱うのに少なくとも 2 コマの時間を確保することが必要であることなど、課題が明らかになった。

キーワード：テレビドラマ、基礎科目、看護学部生、低年次教育、目的認識、学習動機、学習技能、疑似体験

I はじめに

本研究は、医学・看護の基礎科目の履修がその学習活動の中心を占める看護大学の低年次の学生に対して、基礎科目を学ぶ意義を認識させ、その学習動機を高め、多くの学生に見られる暗記を中心とする学習技能の見直しを図るよう促すための教育方法を開発することを目的としている。疑似体験を得るために医療現場を舞台にしたドラマを視聴し、それに基づく意見交換を行うという実験授業を 2 度行い、参加者の口頭および筆記されたコメントと授業観察とをデータとして、学習素材と授業運営方法の妥当性を検討した。

学生たちにとって、病や怪我や老いなどに苦しむ人々を巡ってどのような問題が生じるかを具体的に想像し、それに医療者として対応するのに基礎的知識が重要な意味を持つことを理解することは、容易ではない。核家族化の完成した時代に生まれて、老人や病者との接触経験が乏しい者が大半を占めるからである。半世紀前であればごく当たり前に観察できた人間の様々な生き方、生の人間同士のぶつかり合いに触れる

機会が少なくなっている今日の学生の多くは、看護の関わる場面を具体的に想像し、低年次の基礎科目の学習内容が看護実践に結び付くと実感することが難しい。そのため、日々導入される膨大な医学的看護的知識を、実践技能につながるものとして位置付けることなく、ただ期末試験のために断片的情報として丸暗記し、試験終了後には速やかに忘却するという、実に効率の悪い学習方法によって処理している。

学習態度と学習技能の変更・向上を促すためには「体験学習」によって目的認識を向上させることが有効であることはよく知られている。これを適切な時期に繰り返し行うことができれば理想的であるが、時間の制約上、実行することは難しい。より実行しやすい方法を考案することが必要である。

直接体験を供与することが難しいならば、疑似体験を利用する学習方法を用いることが考えられる。疑似体験を得る方法として最も広く使われているのはロールプレイであろう。しかし、この手法は参加者の知識と想像力に基づいて演技をすることが前提となっているため、一定以上の知識を蓄積した者にとっては有効であろうが、現場の状況をほとんど知らない段階の学

1) 日本赤十字九州国際看護大学

生には実施が難しい。

疑似体験を得るための最も伝統的かつ簡便な手段は、文学作品など「フィクション」を用いることである。現実との接触が少ない者にフィクションを通じて疑似体験を与え、これを学習に利用する試みとしては、日本語教育学の分野で因による一連の研究^{1) - 5)}がある。これらでは、外国人日本語学習者の発話解釈能力と異文化理解能力の向上を促すために、ストーリーマンガを用いて現象の観察と分析を行う学習活動が提案され、当事者として直接体験したのではない事柄を分析対象とすることが、より客観的な立場から幅広い考察をすることを可能にし、学習対象・学習方略に対する認識を深化させると報告されている。また、看護教育についてドラマを用いる試みも行われている²⁾。本研究ではこれらの知見に示唆を受け、医療現場を現実的に描写したドラマを看護学部低年次の学生の学習の意義の理解と学習動機の向上に利用することを試みた。

以下、研究の背景と、実験授業の概要を述べ、実施結果を報告し、考察と今後の展望を述べる。

II 研究の位置づけ

1. 本研究の理念

本研究は、近年特に注目され多くの大学が熱心に取り組んでいる大学初年次教育改善のための試みと位置づけられる。看護学部の教育の目標は、具体的な知識・技術教育を通して人格を陶冶することと、専門家としての技能開発力を獲得することであると言える。この到達点に向かうカリキュラムの低年次の部分では、具体的な知識・技能の奥にある、自己のあり方や価値観、人間の多様性についての内省を促す糸口を提供することが必須であろう。

人材育成論において最近注目を集めているものに、人間のコンピテンシーを氷山にたとえるものがある。このモデルによれば、氷山の水面上に現れた部分、すなわち目に見える知識や技能（ハードスキル）は開発や測定が容易であるが、職務上の業績を高めるには、水面部分にあたる、態度や自己概念・価値観などのソフトスキルに着目する必要があるという⁷⁾。

学習においても同様に「態度・価値観」が業績を高める上で死活的に重要であるが、これらを変化、深化させるために、指示や教唆など外からの直接的働きかけが奏効しないことは、改めて言うまでもない。親や教師の小言や言い聞かせによって心を動かされる学生は、昔も今も多くはない。態度・価値観を変更させる

方法を考案する上で大いに参考になるのは、近年薦められている、学生の直感や感情に着目する教育方法である。ベストセラーとなった『三色ボールペンで読む日本語』でも自己の直感に注目することが推奨されているが、大学教育の現場でも、冷静な知的分析に先立つ直感や感情を意図して意識させる方法が試みられている。例えば、鈴木・鈴木⁸⁾では、レポートライティングにおける学生の問題設定の支援を行うために感情や直感を外化させるという試みが報告されている。問題設定は、具体的な論述作業以上に秀でて主体性を必要とする活動であり、受験勉強を勝ち抜く上で効果的であったかもしれない受身的学習態度から脱皮すること、すなわち、態度と価値観の根本的変更が要求される。この活動でのパフォーマンスを上げるために、感情や直感的判断を外化させ、それを他者と共有し、相互に批判、展開することが試みられ、効果を上げていることが報告されている。

看護学部の低年次学生に対して、態度や価値観をゆさぶる強い感情を抱かせる可能性が高いのは、医療の現場における様々な事例であると考えられる。医療現場がいかにか人間の心を揺さぶる出来事に満ちているかは、医療現場を描いた作品が国内・国外を問わず数多く制作されていることを見ても明らかである。いわゆる「病院もの」や「闘病もの」のドラマや映画は、繰り返しヒット作となっている。こうした恵まれた条件を利用して、医療の現場における具体的な事象を観察できるドラマを視聴し、それに喚起される強い感情、考えを他者と共有し、自分の内面や人間の多様性・複雑性に気づく機会を持つことが、態度と価値観の変化を引き起こし、ひいては、基礎科目学習の意義の認識と学習動機の向上につながるのではないかと期待される。

ドラマを通じた疑似体験の与える刺激は体験の与えるそれとは質や強さが異なるであろうが、一方、当事者ではない立場で分析・観察を行うことには、偏らない観察や分析を可能にし、内省の技能を高める上での効果が高いという利点もあると指摘されている^{1) - 5)}。3年4年次で実習によって直接の体験を得る前に当事者ではない立場で状況分析を行う経験をすることは、基礎教育への取り組み方に望ましい影響を与えるだけでなく、実習における観察の幅と深さを増大させるかもしれない。

2. 研究体制

本研究は、個々の個別の専門知識や技術の基盤となる問題認識や学習動機を形成することを目指す総合的教育の試みであるため、言語学・言語教育学の専門家と医学・医学教育の専門家、及び看護学・看護教育学の専門家という異なる分野の教員が協働して教材開発を行い、実際の授業も協働して進めた。ある分野の教員が企画した活動に他の分野の教員が助言するといった「援助」の域を超えて、本格的な協働体制を構築することによって、看護基礎教育の新たな方法を生み出すことを目指した。

III 研究方法

1. 実験授業の目標

実験授業の目標として、次の3つを立てた。

- 1) 自分の観察を表明する。
- 2) 個別の観察を一般の問題認識につなぐ。
- 3) 問題認識とそれについての議論から、学習行動の必要性の認識へと進む。

すなわち、ぼんやりした観察を煮詰めて、看護師として理解すべきこと、見識を持っておくべきことを認識し、知識を蓄積する意義を知って、学習動機の向上に結び付けるよう促すことを目指した。

上の中で最重要項目と認識したのは 1) である。最近の学生に対する否定的評価として最もよく耳にするのは、「何を聞いても誰も発言しない」「言うことが典型的だ」「教条的な見解を自分の意見として表明し、それが借り物であることに気づかない」「試験前に丸暗記して、済めば全てが消去されてしまう」など、消極性と主体性のなさを指摘する声である。本学の学生も、残念ながら、そうした傾向から無縁ではない。知識の深みに到達しようとせずその場だけの丸暗記で済ませしてしまうことと、自分の意見を持つことも言うこともしないのとは、言うまでもなく、自分が何かと関わろうとしていないという、同じ問題の投影である。従って、本実験授業では、参加者全員が自分の気持の動きを感知し、それを何らかの形で表明するということが、最重要項目と考えて実践した。

2. 実験授業の素材

実験授業の素材として選んだのは、米国 NBC で放送されたドラマ『ER』(緊急救命室) 第 13 シリーズの第 3 話と第 4 話である。このドラマは、緊急救命室で同時に進行している何人もの患者に対する治療や処置

の様子にからめて救命室で働く医師や看護師たちを巡る人間模様が描かれており、いくつもの挿話が並行的に描かれるダイナミックなストーリー展開が人気を集めた。1994 年 9 月 9 日から 2009 年 4 月 2 日にかけて 331 エピソードが日本でも NHK といくつかのケーブルテレビ局で放映されている。

この番組を選択したのは、治療場面や怪我などの様子も含めて描写が非常に現実的であり、医学的正確さと妥当性を十分に検討して制作されていると考えられる上、医療の現場で遭遇する様々な人間の内面の問題が丁寧に描かれているため、視聴して様々な感情を喚起される可能性が強いと考えられたからである。問題点として予想されたのは、ストーリー展開のスピードが著しく速いため、全てを理解できず苛立ちを感じる参加者があるかもしれないこと、医学的処置についての議論や登場人物の治療に関連した行動などを十分に理解するには、学生の医学的知識が未だ不十分であることである。しかしながら、この実験授業の目標は医学的知識を獲得することにはなく、また、視聴したエピソードに出てくるあらゆる問題を網羅的に検討する必要はないため、どちらも重大な障害ではなく、むしろ、目的の達成に有利であると考えた。

2 回行った研究授業の第一回目に用いたのは、「Somebody to love」(邦題：孤独な週末) である。中心的エピソードは、死に臨んで長年の持病に対する治療を拒もうとする同性愛者と、彼の延命を強く望む同性のパートナーを巡るもので、同性愛の患者を拒否してきた血縁者と、家族にも法的にも認められない立場にある長年のパートナーとのどちらの声を医療者は優先すべきなのかという問題、また、「患者を救う治療」とは何なのかという問題が、突きつけられる。

授業に先立って、本報告の筆者全てが視聴し、言語学専攻の因が、インシデントのいくつかから議論の主題として抽出する可能性のある点と、観察・分析の対象となり得る言語的項目とを抽出し、教師用授業資料として準備した(表 1)。医師である吉永が、エピソードの中に出現する症例やそれに対する処置を医学的観点から解説した資料を準備した(省略)。

第 2 回目の実験授業では、「Parenthood」(邦題：親であること)を用いた。このエピソードでは、再婚によって親子になった父子の関係や、離婚によって別居している父子の関係、母親学級の参加者たちの特定の育児法への信憑、ベビーシッターの裏事情などの人間模様から始めて、3 人の急患を同時に担当する医師の

奮闘ぶりや初めて気管切開を行う新米医師の姿などが描かれる。第一回に用いたのと同様の内容分析資料を授業担当者用に準備した（省略）。

表 1：第 3 話の内容概要

<p>議論の主題候補</p> <p>1. 集団での営為の中での個人の裁量、個性 (チームとしての仕事、個人の仕事、個人の信条) ゲイツ:優れた技術を持つが連絡義務を履行しない。 新米の女医:治療中に聖書の詩篇を唱える。</p> <p>2. 専門家訓練の方法 「徹底的にプライドを押し折る」方法の是非。非人間的に見えるが、「賢い新人」の犯しがちな、低いレベルでの完成(化石化)を防ぐ効果はあるかもしれない。</p> <p>3. 患者のための治療とは? 親族と親族が認めないパートナーとのどちらを、参照先として優先すべきなのか。 患者の本当の意志とは?アンダーソンは、本当に透析を受けたいのか、パートナーの願いに押し切られただけなのか。命は救ったが意識が回復することのない状態に追い込んだ医師は、患者を救ったのか。彼のパートナーを救ったのか。</p> <p>4. ミスへの対応。 ミスをした後、どうする?本人は。周りは。</p> <p>5. 命をつなぐということ 同性愛者として生きてきた患者は、なぜ、死を前にして甥にだけは会いたかったのか。</p> <p>言語面での観察対象</p> <p>1. 「皮肉」のメカニズムの共通性 2. 「拒絶」の実行の SCRIPT、フォーミュラ 3. 「冗談」の位置づけの個人性、文化性</p>
--

3. 実験授業の活動

実験授業の活動の種類は、次の 3 つである。

- A. 受信活動：ドラマ視聴、他者の質問や発表の受信
- B. 発信活動：elicitation, label work, discussion, short presentation
- C. 情報提供：医療情報の解説

B の発信活動のうち、elicitation は、表 1 に示した内容分析資料に基づいて進行役の教員が質問を投げかける活動である。Label work とは、短時間に参加者全員に自分の反応を表明させるために、林義樹⁹⁾などで提

唱されている「ラベルケーション」を参考に考案した「一言メモ」と「ワンパラコメント」を指す。前者には 5×7cm、後者には 7×21cm の大型付箋紙を用いた。Short presentation は、内容に関連する医学的

表 2：第 1 回実験授業計画

<p>概要・医学的説明 (吉永主導) 5 分</p> <p>↓</p> <p>視聴 45 分</p> <p>↓</p> <p>一言メモ執筆 (因主導、以下同) 5 分</p> <p>↓</p> <p>一言メモの開示と論点の整理・Discussion 20 分</p> <p>↓</p> <p>有志担当者の予備学習結果の発表 7 分</p> <p>↓</p> <p>ワンパラコメント執筆 8 分</p>
--

表 3：第 2 回実験授業計画

<p>視聴 45 分</p> <p>↓</p> <p>一言メモ執筆 5 分</p> <p>↓</p> <p>一言メモの開示と論点の整理 12 分</p> <p>↓</p> <p>elicitation・discussion 15 分</p> <p>↓</p> <p>医学的議論・補足説明：(吉永主導) 5 分</p> <p>↓</p> <p>ワンパラコメント執筆 8 分</p>

情報を、予めドラマを視聴して調査をした参加者のうちの有志数名が発表するものである。

授業活動の組み立ては、情報先行型と素材先行型とに大別できる。いわゆる、「なるほど型」(先に習ったことを実例で確認する)と「どひゃー型」(実例を先に示して驚きと混乱を与え、学習動機として利用する)である。素材に盛り込まれている医学的知識の理解と獲得を重視する立場からは前者の方法、学習者による問題発見を重視する立場からは後者の方法が適切と考えられる。2 度の実験授業では、第 1 回目は前者、第 2 回目に後者を採用することにし、表 2, 3 に示す計画を立てた。

4. 実験授業の実施方法

第 1 回目は 2009 年 10 月 29 日 (木) の 5 時間目 (16:20-17:50)、第 2 回目は、2010 年 2 月 22 日 (月) の 12:30-14:00 に行うことにした。

表 2、3 に示すように、医学的補足説明の部分では医師である吉永、その他の部分では因が進行を担当し、力武、石橋は 1 参加者として議論に参加した。

参加者は、予告した段階で 4 年の学生からも参加の希望が表明されたため、低年次に限らないことにした。高年次の学生が共に受講することによって低年次の学生の学習が阻害される可能性はないと考えたためである。講義クラス等を通じて広知するほかに、個人的関係を通じた勧誘も行った。

5. 授業の評価法

参加者の書いた一言メモ、ワンパラコメントをデータ化するほかに、活動の様様について 4 名の研究者全員がノートを取り、それらの結果に基づいて、素材としたドラマ (エピソード) 選択の妥当性、活動の妥当性、目標達成度を質的に評価した。

IV 結果

1. 実験授業経過

第 1 回目の参加者は、学生 19 名 (内訳は、1 年生 7 名、2 年生 6 名、4 年生 6 名)、教員 3 名の計 22 名であり、第 2 回目の参加者は、学生 11 名 (内訳は 2 年生 2 名、3 年生 9 名) と教員 4 名であった。

第 2 回目の参加者が前回の半数に留まったのは、期末試験・再試の実施時期と重なったためである。第 1 回参加者で 2 回目に参加しなかった複数の者から、参加したかったという要望と実施時期への不満が表明された。実験授業の実施時期の計画には明らかに慎重さが不足していた。

また、医療情報提供のタイミングを考察するデータを得ることができなかった。計画では、これを第 2 回では視聴後に行い、視聴前に行った第 1 回との比較によって前後のどちらが適切か考察することになっていたが、第 2 回授業において、授業担当者の一人の判断で視聴前に医療情報の提供が行われてしまったため、比較を行うことができなかった。

上記の他は、概ね計画通りに授業活動を行った。

2. 一言メモに表れた観察

一言メモは、視聴した中で最も印象に残った言葉や

シーン、出来事を一言で示すもので、参加者の理解度と関心を最も端的に示している。原則として原文のまま以下にあげる。

表 4: 第 1 回「Somebody to love」一言メモ

<愛>

- ・ クレイの「彼を愛している。愛しているんだ」の一言に何だか心打たれました。
- ・ ゲイツはニーラが好きなんじゃないの?

<延命治療の是非、意義>

- ・ 植物状態になるのに助けるのは、いいことか、悪いことか?
- ・ 延命治療をアンダーソンは望んでいなかったはずなのに、クレイのあれはゴリ押しだ。
- ・ ジギバンドを勝手に投与したゲイツに、「先生はよくやってくれた」といったアンダーソンのパートナーの思いの重さ。

<治療方針の決定者>

- ・ 生死を判断するのは恋人ではなくて家族か?
- ・ アンダーソンの治療方針を決めるときに、家族がクレイに「部外者は出て行ってくれ」といった。
- ・ アンダーソンの家族は、同性愛者であるアンダーソンを嫌っていたが、ゲイツは、同じ同性愛者にも決定権があると言っていた。
- ・ 家族よりも恋人の意志を尊重して、ジギバンドを勝手に投与したところ。
- ・ アンダーソンの同性愛のパートナーと家族が延命治療について言い合っているシーンが一番印象に残った。
- ・ 同性愛者は異端者だとみなされ、意見を聞いてもらえず、ろくに連絡も取っていない血縁者に決定権があるとされていることに、嫌悪感を覚えた。

<医療者の仕事の方法>

- ・ ゲイツが投薬チェックをしていなかったが、看護記録があったお陰で、わかったこと。
- ・ ちゃんとカルテに書き込むべきだと思った。
- ・ ジギバンドをゲイツが勝手に投与して植物状態になったことで指導医と揉めていたのが印象に残った。
- ・ 投薬記録をきちんと見なかったこと。

- 患者の前で言い争うこと。
- 患者さんの前での討論が気になった。

<新人訓練の方法>

- 新人のインターンは医療処置をやりたくてしかたがない。「包帯交替などは看護婦にやらせておけばいいはずなのに」といった。ドクターの役割は？
- 「人を苛めて侮辱して嫌な気持ちにさせる、それが一番効果的な訓練方法なんだよ」というのは本当なのだろうか。

表5：第2回「Parenthood」一言メモ

<救急医療現場の実情>

- ごちゃごちゃしている (3年)。
- 医療現場の混乱 (3年)。
- 医療用語が多くてわからないことだらけだったが、救命はめまぐるしいということはわかった (3年)。
- ERでできることとできないことを区別しなければならぬのではないかと (3年)。
- ERでは、迅速な判断が必要だということがわかった (3年)。
- あんなにバタバタしているのに、カルテ書きが徹底されていたのに驚いた (2年)。

<患者への対応>

- プライバシーの確保に日本とはギャップがあると感じた (3年)。
- 患者を人間として扱っていないように感じた。あのような接し方でいいのか (3年)。
- 生死を分ける場面では、患者や家族への精神面のケアが難しいと感じた (3年)。

<共同作業のやり方>

- あのような緊迫した場面では、各個人が思っていることや判断したことは (脇において)、上司の指示に従わなければならないのか (3年)。
- 処置をしたくない患者を他の職員に回したりしてのいいのか (3年)。
- 嫌みなドクターが、処置して後に来て、ねちねち言っていたのはどういうことだろうか (3年)。

<教える、学ぶ>

- 学生でも受身でないのが印象的だった (2年)。
- 個々の人のよいところを伸ばす指導をしなければならぬと思った (3年)。
- 学ぶことを妨げる要因には以下のようなものが含まれる：現実逃避と他者依存 (手技の下手な女医)；自分が慣れている、あるいは信じている方法への固執 (カルテ音声入力への反感、赤ん坊用スリングへの盲信、ドラマの中ではないが、詳細な知識供与という方法への盲信) (教員)
- 学習可能性の決定的不足を想定すべきか。
- 救急隊から医師を目指す医学生に優位性を誇示する指導教員の威圧的態度 (3年)。

<ドラマを見ることの意味>

- 手術のシーンや外傷の様子が、日本のドラマと違ってちゃんとリアルに映されている。実際に目にする前にこれを映像で見られてよかったと感じた (3年)。
- 気管挿管の場面が印象的だった。
- もともと (このドラマが) 好きでDVDを借りてよく見ていたので、登場人物の性格などはよく理解できた (2年)。

一言メモから参加者が関心をもって観察した項目を抽出すると、延命治療の是非、治療方針の決定者、チームにおける個人の位置づけ、患者への対応、新人訓練の方法、恋愛模様 (以上第1回)、救急医療の現実の厳しさ、患者への対応、共同作業のやり方、新人訓練の方法、ドラマを見ることの意味 (以上第2回) となり、表1に示した、教師が抽出した項目をほぼ網羅している。第2回では、ドラマ視聴という学習方法そのものに注目する、学習方略についてのメタ認知的視点が見られることが注目される。

3. ワンパラコメントに見られた学習者の認識

一言メモの結果をもとに進行役の教員が論点を整理し、質疑や話し合いを行った後、クラス活動の最終段階で7-10分程度でドラマとその後の活動に対する自分の見解をワンパラコメントにまとめた。第1回実験授業の参加者による記述を示す。

表6：「Somebody to love」ワンパラコメント

1. 初めて ER の授業に参加して、知識を得る授業なのかと思ってきたが、参加者それぞれの視点をま

とめたり、先生の言葉によって新しい視点や曖昧に感じていた部分が明確になるなど、意義のある時間だったので、また参加して、もっと自分の視点や意見を深めたいと思う。

2. 今まで、ER を見ていろいろなことを感じ取ってきました。そして今回、他の人の意見も聞くことによって、そんな考え方もあったのかとさらに勉強になった気がします。今回出たことを、少しずつでも自分なりに深めていけたらいいなと思いました。
3. 私は今まで延命反対派だったけれども、4年生の話を聞いて、別の価値観を持つことができた。人と話すことの大切さがわかった。
4. 緊急の事態だからこそ、延命について冷静に考える環境を作らなければいけないと思う。
5. 医療の現場で起こることは、正解・誤り、というものはないと感じました。そのため、家族や医療関係の人々のコミュニケーションが重要になってくると感じました。
6. 延命治療やコミュニケーションの問題など、どれ一つをとっても、いろんな、ひとそれぞれの考え方があって、さらに自分の考えの幅が広がった。DVDを見て、看護師の役割は小さいかもしれないけれどもとても大切だということがわかった。
7. 初めてERを見て、細かい言葉まで医療的なものが入っていて、よい番組だと思いました。延命に関しては、流れの中でどっちにしたらいいのだろうという考えが自分の中に浮かんできたので、実際の現場に立ったら自分はどんな判断をするだろうと思った。
8. 日本と違い、あの救急の騒々しさの中で、延命などを決めるのは難しいと思った。
9. 医療の現場で実際にあり得ることの問題のドラマであり、いろいろ考えさせられました。医療職者としてどのように対応していけばいいのか、今の段階ではあまりわかりませんが、これからいろいろ経験し、学んでいかなければならないと感じました。
10. 同性愛への理解や愛ってなんだろうとすごく考えさせられました。延命治療の決定権は誰にあるのだろうか。
11. おもしろかったです。1年生は事前に見て感想を用意していて、意見もよく言っていたので、すご

いなと思いました。また、1年生と4年生の考えの違いなど、同じものをいっしょに見た人が何を感じ、考えるかを聞くことは、自分の感じ方、考え方も広げることができそうだなと思いました。

12. 今回ERを見て考えたことが二つあります。一つは同性愛についてです。日本ではあまり聞かれませんが、外国では多くあることなのかと感じました。二つ目は、救急医療における忙しさです。患者は生命の危機に瀕しており、その場での確な判断をしなければならないと感じました。
13. 私は基本的には延命治療に反対です。ですが、アンダーソンさんのように延命治療をしても週単位でしか生きられない場合は賛成します。それは、お別れする時間が十分取れるからですが、週単位だから、月単位だからということで延命治療の有無(是非?)を決めるのは良いことではないので、本当に難しい問題だと思いました。
14. 久しぶりにERの現場を見て、とても驚きました。この現状から考えさせられる問題がたくさんあって、治療というのは患者の命を救うためにあるものなのに、治療って一体なんだろうなと思いました。
15. 初めてこの講義に参加させて頂きましたが、実際に臨床でも起こり得ることであると思い、このように考える機会があつてよかったと思いました。また、延命治療や同性愛など難しいテーマではありましたが、今後も考えていかなければいけないと感じました。実習のときのカンファランスを思い出し、自分の気持を伝えることの大切さを思い出しました。
16. 同性愛や決定権、延命治療など、たくさん問題について考えさせられました。延命治療はしてよかったのか、私にはわかりませんが、終末期の家族看護についての講義を受けたばかりなので、あんなに急に決定を迫れた家族やパートナーは冷静に判断できないだろうなと考えました。主に、したほうが、心の準備ができて、死に対して向き合えるのではないかと思います。
17. やっぱり、人それぞれ着目するところが違って面白い。私たち2年生ぐらいが、多分、一番、いろいろな知識を詰め込まれたので、延命治療等の難しい問題には結論が出しにくいと思う。でも今こうやって考えることに意味があると思うし、様々な個別性を考えたケアというのを考えると、こうして他人の意見を聞く機会は貴重な経験だと感じた。

18. ERのような切迫した状況下での適切な状況判断、治療、家族内のことなどを一気に把握していかなくてはならないため、**膨大な知識と経験、判断能力が必要だと感じた**。そして、同性愛に対しては、偏見などが強く、問題が多いと感じた。アメリカでこれだけ強い反発を受けると、日本ではどうなるのかと不安を感じた。
19. 医療を行う**現場の中で自分がとる行動を見直す機会となった**。
20. 自分の大切に思う人が目の前で死にそうになったとき、**自分はとても冷静ではいられない**と思うし、医療者への憤りが爆発すると思う。
- 21.自分が感じたこと以外の、他の感想や、**自分とは違う意見を持った人の意見を聞いて**、少し考えも変わったし、自分が見ている角度とは別の角度で見ていたので、考えが深まった。週単位の生であるなら、延命治療はしなくてはよいと思ったけれども、他の意見で、考えが変わった。

太字によって示した部分から明らかなように、多くの参加者が「人の意見を聞けること」を評価しており、それが自分の考えを見直すきっかけとなると感じている。また、救急の現実、延命治療の決定権など、医療の現場における問題を認識し、自分だったら、という視点で考えている。「膨大な知識が判断には必要」など、今後の学習課題の認識も見られる。

次に第2回の実験授業のワンパラコメントは、医療現場の事情についての考察を含んだものが5件(表7、A)、自分の学習についての示唆を含んだものが6件(表7、B)、具体的な医学的知識についての質問を含んだものが2件(表7、C)あった。紙幅の関係上、コメントの一部を省略して示す。記名のあったものについては、学年を示している。

表7：Parenthoodについてのワンパラコメント

A：医療現場の事情についての考察を含むもの 5件

1. (前略)それぞれアプローチが異なっているからこそチームで行うのだが、(チーム運営は)難しいと改めて感じた。上司は指導する責任があり、「上から目線」で威圧的に見える。必要なことであるが、下の立場の者が不利になっているように感じた(3年)。
2. (前略)患者も看護師も医師も実際の現場である

ように描かれ、手術の場面もリアルで、イメージが掴めた。急患が来たときの的確で迅速な判断力が本当にすごいと思った。(3年)。

3. (前略)生命の危機の高さによって治療が優先されたり後回しになったりしていた。個人個人のよさが活かせるチーム体制が取られていれば、同じ状況でも対応が違ったのではないかと(3年)。
4. (前略)「叱られる、怒られる」と思うことでプレッシャーがかかり、なぜそれをしてはいけないのか、本当の意味が伝わっていないかもしれない。本質的な意味を伝えるのはどうしたらいいのか、それを知らうとする姿勢はどうすれば作れるのか。
5. (前略)生命を護ることが優先するとき、人間の感情を尊重し大切にすることは難しいのか(後略)

B：自分の学習についての示唆を含むもの 6件

- 1.(前略)救急医療は状況を予測することができない。医師やナースはバタバタしていても冷静に判断する能力や医学的知識が求められると感じた(3年)。
2. (前略)現場で働くには多くの知識だけでなく、臨機応変に行動できる能力が必要であると感じた。看護師にも多くの医学的知識や判断力が必要とされ、チームの一員として力を発揮できる能力が必要だと考えた。(後略)(3年)。
3. (前略)ERを見るのはとても勉強になった。たくさん患者をみて、どの人がどの疾患であるのかを理解しておかなければ治療ができないと思った。日本にもERのような現実に近いドラマがあればいいと思う。
- 4.今の私の知識では全くダメだということに気づかされた。医療用語が入っているけれども、その意味を理解できなかった。(後略)
5. (前略)講義で優先順位の重要性について習ったが、本当に医療現場においては重要なことで、その場その場で的確な判断を瞬時に下すということは、知識も経験も必要だと改めて感じた。(2年)
6. (前略)ストーリーは、最初に説明があっても、医療的な言葉が多くてついていけなかったが、実際に映像を見ることでイメージが湧いた。聞いたことはあるけれども、意味が理解できないことが多くて、勉強しなければいけないと思った(後略)(3年)

C：具体的な医療技術についての質問

1. 赤ちゃんの抱き方について、母親たちの「スリン

「でなければ」という認識は単なる誤りなのか、一つの考え方に対する偏りなのか。

2. ジョーンズ骨折とダンサー骨折について知りたい。(3年)

以上、2回の視聴それぞれから、参加者が救急医療の現場の厳しさを実感し、そうした場で働く看護師が高度な知識を必要とすることを自覚したことがわかる。特定の医学的基礎知識への関心を示している者もある。また、医療倫理、生命倫理に関連する主題についての考察が誘発されている。このように、ドラマ視聴および議論から、主体的に学習しようとする態度が芽生えていることが観察される。

他者の見解に対する強い関心が示され、それが自身の内省に与える意義を自覚していること、ドラマ視聴の意義についての記述が見られることなどは、学習方略について考察が行われたことを示すと判断できる。

この実験授業は低年次の学生に向けて企画したものであったが、3、4年生からも、ドラマの内容や低学年の学生の発言から大きな刺激を受けたという発言が複数見られた。

V 考察

1. 素材、活動の計画の妥当性

素材として選択したドラマは参加者の感情的反応を喚起し、そこから、生命倫理や医療のあり方に関する考察へと自然に進むことができた。「一言メモ」と「ワンパラコメント」は、全員に発信の機会を与えかつその結果を直ちに開示することを可能にした。従って、今回使用した素材と議論誘発のための方法とは、目的に適合していたと考えられる。

進行方法に関して言えば、医学的知識供与を行うタイミングについては検討することができなかった。第2回目の授業進行予定が授業担当者の一人の独自の判断で変更されてしまったからである。直感的には、医学的知識供与がドラマの内容や主題の理解および医療者のあり方についての考察を大きく左右するとは感じられず、本活動にはⅢ-3に述べた「どひゃー型」が親和的であり、医療情報提供は視聴後に制限的に行うのがよいと思われた。しかしながら、今回の実験授業には既に一定の知識を持っている3、4年生も参加していたため、低年次の参加者だけであった場合にも議論に支障がないと断言することはできない。

進行について予定外の事態が生じたことは、授業担

当者である我々に、「意識革新」と「相互コミュニケーション」が不足していたことを凶らずも明らかにした。新しい目的を達成するには新しい方法が必要であり、従来型の授業で機能した方法を封印すべき必要も出てくる。学生に意識の更新を求めるならば我々教員こそがまずその更新を行わなければならないのであったが、それが十分に行われていなかった。学生が「暗記」という一つの学習方略に固執することを問題視していた我々自身にも、従来の知識供与型に固執するという同様の問題があったと言える。しかし、これを自覚する機会が持てたことは大きな収穫であった。問題を認識できたことを奇貨とし、今後の改善に結び付けたい。

2. 授業目標の達成度

授業目標として立てた、1) 自分の観察を表明する、2) 個別の観察を一般的問題認識につなぐ、3) 問題認識とそれについての議論から、学習行動の必要性の認識へと進む、という目標は、学習者コメントに見られるように、概ね達成されたと考えられる。しかしながら、2)については、時間的な制約のため、教師主導で問答を行うという形で進められ、学生同士で観察を問題認識に収斂させる過程を主体的に行わせることができなかった。また、3)については、知識不足と学習の必要を感じ、より熱心に勉強したいという意志を示したものの、具体的な行動計画への言及はごく一部であった。

3. 運営上の問題点

実験授業の実施日の設定、および、実施時間には仮題が残された。参加者の中には、後で担当者に自主的にメールを送ってきて、継続的实施への希望を表明した者もあるなど、潜在的に参加を希望する者は少なくないと感じられるが、学生の参加しやすい日程を選ぶことへの配慮が不足していたと反省せざるを得ない。また、授業時間も、50分弱のドラマを視聴することを組み込むのなら、90分一回では時間不足であった。

VI まとめと今後の課題

今回の実験授業の素材としたドラマとクラス活動として用いた方法とは基本的に適切であり、掲げた目標を達成するための方法としてこの授業方式は大いに可能性を持つという結論を得た。また、問題点が露呈したことも含めて、異分野の教員が協働してみることに大きな可能性があると考えられた。

今後の課題は、理念に関わるものとしては、異分野

の教員間で「態度・価値観」に踏み込むような実質的議論を行う場を確保することがあげられる。具体的方法論に関わるものとしては、より多くの作品を見て素材候補を増やすこと、2 コマの活動を可能にするカリキュラムへの組み込み方を工夫することである。

謝辞

本研究は、平成21年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究として助成金を受けて行った。記して感謝の意を表す。

〔 受付 2010. 9. 5
採用 2010. 12. 8 〕

文献

- 1) 因京子：社会文化技能を育てる教材の開発に向けて。台湾日語文学会 2008 年度日本語文學國際學術検討會會議手冊、pp 32-39、2008.
- 2) 因京子：文化的素材による受信力重視の日本語教育—真の発信力を育てるために—。日本語学研究 第19 輯, 韓国日本語学会、pp 1-12, 2007.
- 3) 因京子：談話ストラテジーとしてのジェンダー標示表現。日本語とジェンダー、pp 53-72、東京、ひつじ書房、2006。—日本語学習者によるマンガ理解を通して—、比較社会文化第11巻、pp 83-92、2005.
- 4) 因京子：マンガで学ぶ日本語：マンガを使った日本語教育の可能性、漫画研究への扉、pp 133-154、福岡、梓書院、2005.
- 5) 因京子：日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点—日本語学習者によるマンガ理解を通して—。比較社会文化第 11 巻、pp83-92、2005.
- 6) 石橋通江：精神看護学演習におけるサイコドラマの教育的効果—ドラマ体験に見られた感情と気づきの形成—。日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report 第 6 号、pp 49-57、2008.
- 7) Lyle M. Spencer & Singne M. Spencer, Competence at Work: Models for Superior Performance, New York: Wiley, 1993.
- 8) 鈴木宏昭・鈴木聡：レポートライティングの問題設定における直感と感情。学習と対話 vol. 2010, No1. 3-12, 日本認知科学会、2010.
- 9) 林義樹：参画教育と参画理論—人間らしい『まなび』と『くらし』の探求。東京、学文社、2002.

Development of Teaching Method to Enhance Nursing-Majoring Students' Motivation for Learning Basic Subjects by Using TV dramas Set in Medical Facilities

Kyoko CHINAMI,M.A.¹⁾ Yumi RIKITAKE, M.A.¹⁾ Muneyoshi YOSHINAGA,M.D.¹⁾
Yukie ISHIBASHI,Ph.D.¹⁾

As an effort to develop appropriate teaching contents and activities for nursing majoring freshmen and sophomores before taking on-the-job trainings, we planned and performed two experimental classes using TV dramas set in medical facilities in order to 1) form the students' emotion-rooted understanding of the relevance of basic knowledge in medicine and nursing for good practice on the job scenes, and 2) enhance their motivation for learning the basic subjects. From the oral and written comments made by the participants in the experiments, it was obvious that the participants were emotionally moved by the episodes, they watched, and we observed emerging understanding of how basic knowledge supports good performance and improved recognition of the objective of leaning the basic subjects and enhancement of leaning motivation. Thus, we concluded that the materials and activities we used were basically appropriate, and very promising for achieving our goals. However, as we spent a considerable part of the relatively short class time for offering medical knowledge and heavily leaned on elicitations, we had only very little room for students'initiation. For a better performance, it is crucial for the teachers to focus on assisting the students' spontaneous recognition and thinking, instead of providing them with actual pieces of knowledge. Also, at least two periods of classes will be needed for doing substantial discussions among participants.

Key words: TV dramas, basic subjects, nursing students, education for freshmen and sophomores, Motivation for leaning, leaning skills, simulated experience

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

